東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第13回　後編

話し手：坂本 一 さん

**不登校が増えた理由**

まず、隣町の角田市には私たちのメインの教室があるんですけど、そこで2013、14年くらいから不登校のこどもが急増しました。中学校での出現率が7％を超えるような状況ですね。当時は全国的には3％とか4％というような中でした。中学生が100人いたら7人は不登校っていう状況になってきて、これは大変だということで、始めは角田中学校という中学校の中の居場所作りを4年間くらいやりました。これからお話することは私の仮説なので、ちゃんと実証できるかどうか本当に自信ないですが…社会が大きく動揺した時に、その影響は、一番基盤の脆弱な家庭のこどもたちに現れると思っています。角田市の場合には、人口の増減がものすごく多かったんです。震災直後は、福島県の北部から宮城県の沿岸南部の人達が、短期的にかつ大量に移住していて、中学校の児童数もものすごく増えました。そこから福島県の避難指示が解除されていく中で、2013年くらいまでに少しずつ、元の地域に戻っていく、ということがありました。一昨年くらいまでは福島県から角田市の中学校に一名、教員の加増というのがあったくらいでした。この大きな社会移動があったことが、原因のひとつだと思っています。実際に不登校の子たちの支援をしていたのですが、ご両親が何かしら疾病を抱えているご家庭、収入が非常に厳しく生活保護や住民税非課税のご家庭、ひとり親家庭、きょうだいがものすごく多い家庭など、もともとその地域にいたこどもたちで、基盤が脆弱だった子たちが不登校になりがちだなと見えていました。たぶんその原因っていうのが、社会移動というか、社会の動揺なんじゃないのかなというふうに思っています。必ずしも外部から流入してきた家庭のお子さんが不登校になるというわけじゃないんですね。不登校の急増した地域について2013年くらいに調査をした方のお話で、沿岸で直接大きな被害を受けたところというよりは、そこから少し中に入った地域、あるいは物理的にはわりと早く復興して生活自体は平常化していった地域のこどもたちに不登校が多くなっていった、というのがあるので、間違いではないのかなと思っています。

一方で山元町では、震災直後、2011年、12年、13年というのは外部支援がものすごくたくさん入っていた時期でした。私たちもそうですけども、それ以外にもこどもたちや高齢者、困窮者向けの支援というものがたくさん入りました。社会の動揺というものはもちろんあったんですけども、地域の人達のつながりが深まり、外部の支援の力で支える仕組みがあったために少し遅れたんじゃないのかと思っています。山元町での不登校の原因としてひとつ思い当たることとしては、そのこどもたちが幼児期だった頃は大人が一番忙しい時期だったことです。2011年から14年くらいは、生活や地域のインフラの立て直し、事業の立て直し、みんな本当に忙しい時期でした。そういった時期に、幼児期を過ごした子たちの不安定さっていうものは今、感じています。やはり、その時ものすごい一生懸命がんばっていたお父さんなんだけども、たぶん、家庭を顧みる機会はあまり持てなかったんだろうなというようなことが背景にありそうなケースにいくつか当たったことがあります。なので、震災のような大規模な災害があった時に、こどもたちの支援としてどこに向かったらいいのかということについて、自分たちは翌年受験を迎える中学3年生をなんとか支援しなきゃと思っていましたが、こうやって過ごしてみると、焦点がずれていたんじゃないのかなという反省はあります。むしろもっと下の、小学校の低学年や未就学のこどもたちにちゃんと目を向けなければいけなかったんではないか、その子たちこそ一番大きな影響をこうむっている可能性があるんじゃないかっていうのを今、反省しているところです。

**世代の違い**

私たちは、2011年からずーっと中高生を見てきた中で、こどもたちの世代ごとに傾向があるということをスタッフと共にまとめています。まず、震災の時に中学生だったこどもたちは、震災時にちゃんと言語化できた、自分たちがどんな被害を受けて、どんなことをやってかなきゃいけないのかということをちゃんと言葉で理解して、内面化できた世代でした。なので、けっこう元気でした。特に、ちょうど3月11日の時に中学1年生だった子たちは、勉強もスポーツも一生懸命だし、ものすごく充実した中学校時代を過ごして、進学の実績とかも過去にないような実績を残した世代です。たまたまかなと思ったら、2019年の台風災害でかなり大きな被害を受けた丸森町にも私たちは支援に入っているんですけども、そこでもやはり、発災した時の中学2年生っていうのは翌年の受験でやはりものすごく成果を出していて、一生懸命勉強しているということがあるので、これはたぶん確かだと思います。発災当時に中学生だった子たちは、背中を押してあげれば大きな成果を残せる世代です。その一方で、その下の小学校4、5、6年生だった子たちは、ちょっと不安定というような傾向が見えました。基礎学力の定着に不安を感じるとか、自分の将来への漠然とした不安感、あとは何かを選択していく時の消極性、自分には何もできないんじゃないかっていうようなことを思った子たちが多く現れた世代です。さらにその下の、当時小学校1、2、3年生だった世代は、言語化できなかった世代です。ここは、本当に落ち着かない学校生活で、あちこちの学年で学級崩壊が起きていました。当然基礎学力の定着が不安定ですし、この世代の子たちから不登校の傾向が増えてきています。私たちの居場所に来るこどもたちは中学生が多いので、深く観察できるのは中学生からで、そのこどもたちが小学生の時はどんな様子だったかをさかのぼって考えたり、中学校の先生を通して聞いたりしていました。また、この時期は学習塾の運営と支援活動の運営を分離せずに、両方の仕事に関わるようにスタッフを配置していました。夕方は放課後の支援をしながら、夜は学習塾の仕事をするなど、被災地域の子とそうじゃない地域の子の比較について、この世代はこんな感じだね、ちょっと世代が変わった感じあるよねというふうに、割と頻繁にインフォーマルな話を積み重ねて考えていました。

**支援のはじまりと続けること**

2011年の3月末くらいに、気仙沼に支援物資を届けに行った帰り道、石巻の近くでこどもたちが道路脇の縁石に座っていたんですよ。夕方近くで、何人ものこどもたちが縁石にぼーっと座って佇んでいるのを見た時に、あ、これはとんでもないことが起こっているんだなということを実感して、この子たちが身を寄せる場をなんとか作っていかないと、この子たちどうなっちゃうんだろう、と思いました。そこは石巻だったんですけども、きっと同じようなことが山元でもあるだろうということで、山元のニーズ調査に同行したというのがきっかけです。ここまで続けることができた理由は、きちんとお伝えできるかわからないのですが。最初の学習支援の場所は仮設住宅の集会所だったので、始める前に説明会を開き、20世帯くらい集まっていただきました。概要をお伝えして、ぜひご参加くださいというようなことをお話した後に、参加を希望する方はひとりひとりお話をお伺いしました。そうすると、待っている間に保護者の方同士で、いろんなところでお話がはじまりまして。というのも、震災後にまともにお話できる機会っていうのが、その時初めてだったらしいんです。それまで一緒の地域でこども会の活動とかしていた保護者の方々がようやく仮設住宅に入って、いやー久しぶり元気だった？とか、どうなの？どんな風にしているの？ということをお互いに気を遣いながら話をされていたんです。私はひとりひとりのお話を聞きながらも、その立ち話の中からあるお話が聞こえてきてですね、うちの孫さ、もう、2カ月以上経つんだけども、震災からもう、お母さんって一言も言わないんだって。というのだけ、ぽんとこう聞こえてきていたんです。その時はなんとも思わなかったんですけど、説明会を引き上げて帰ってくる時に、ようやくわかりました。お子さんを津波でなくして孫が残されて、その孫をおばあさんが引き取って、いま仮設に入っているのだ、と。そして、孫がお母さんって言わない、心配なんだっていうことでした。そういう状況を聞いた時に、あれ、俺たちここでやれるのかな、どうしたらいいだろうと思いましたが、いや、これはもう来るなって言われるまで続けるしかないかな、その子が笑えるようになるまで、元気だなって思えるようになるまで、とにかくそこにいようねっていうふうなことで、目標を立ててやってきたということが大きいです。この子だろうなっていうのは、後々はわかったんですけど、まぁけらけらとよく笑う元気な子でした。あぁ、やり切ったなという風に思ったのはその子が中学を卒業した2019年あたりで、あの時やろうと思ったことはやり切ったかな、というような感触でした。あとは、冒頭でお話した校長先生のお話ですね。結局その地域のこどもたちの状況を代表するようなものっていうふうに自分は捉えたんですね。だから、続けなきゃねっていうふうに。で、ひとつ約束事としたのは、震災当時どんなことがあったのということに関しては、こちらから聞き出すことは一切ＮＧということです。しかし、こどもたちは少しずつ言葉にするんですね。1年経って、中学生の子たちが、実はね…と話し始めました。部活で走ってるときに津波が来てさ、こいつが手を引っ張って引き上げてくれたから俺助かったんだよ、ということ。しかし、その子はキャッチボールのパートナーは、流されて亡くなっているんです。だから、あいつは助けられなかったけど、こいつは俺が引っ張り上げたんだ、と。あとは、リビングルームにいたら窓の外に急に水があがってきて、いろんなものが窓の外にあってね、水族館みたいだったんだ、みたいなことをにこにこしながら話している子もいました。そういう話がよく聞こえたのは当時中学生だった世代で、この世代はいろいろな話を聞かせてくれました。

**これからの話**

こどもたちにとって曖昧な場所が必要だなと思っています。目的合理性を、ある程度水面下において、特に目的がなくても参加できるような、そういう場所が大人であってもこどもであっても必要ではないでしょうか。山元町で、不登校のこどもたちの支援のリーダーをやっているものが、大人だって、むしゃくしゃした時にスナック行って、一通りお姉さんとお話して、すっとして帰っていくじゃない、と。こどもだってそういう場所必要でしょっていうのを言っていました。じゃあ大人がスナックに行って生産的な活動ができるかというと、必ずしもそんなことは目的としていないわけですよね。大人、こどもに関わらず、目的合理性ということをある程度排除して、たわいもないことで過ごせるような場所っていうのは、必要なんじゃないのかなと思っています。現代は、息苦しさというか、その時間、その場所、その目的はなんだろうかっていうことが、ものすごくかっちりと定義されているものばかりがたくさん並んでいる時代だなという風に思っていまして、自分はそういうものにものすごく息苦しさを感じる人間なので、そうじゃないものを提供したいです。自分が、あったらいいなと思えるような場所は、どういう風にでも使える、どういう風にでも過ごせるような、余白を残した場所です。外の世界につながっていくきっかけになるような場づくりができたらいいですね。

**◎まなびの森の坂本一さんにお話を伺って**

**酒井真由子**

坂本さんが震災に遭ったのは、ご自身で学習塾を開こうとしていた矢先でした。震災直後、坂本さんはすぐに子どもの居場所を開設します。そして４月中旬、インフラが戻ったところで学習塾を開きます。その後も坂本さんは、子どもが集う場所を創っていくのですが、私は坂本さんの話を聞きながら、新たな居場所を創っていくというよりは、「うようよと居場所のカタチを変形させている」ようなイメージを持ちました。なぜそう感じたのだろうと思い、今回、私は改めて、坂本さんが行ってきたことのプロセスを、坂本さんのお話をもとにノートに書き写してみました。すると、坂本さんは目の前の子どもの姿と、先生や保護者、専門家など子どもと関わる人々の話や意見と、データ・統計をもとに、ご自身が行っていることを見返して、批判的に省察しながら、加えたり、修正したり、新たに創ったりすることを繰り返しておられることが分かりました。

そして、坂本さんはご自身の経験だけに頼らず、分析的な視点と全体を見る視点を持ち合わせながら、居場所創りをしていると思いました。例えば、坂本さんは震災直後、こどもたちの支援として、翌年受験を迎える中学３年生の支援に心を砕いています。そして数年後、坂本さんは仲間（スタッフ）と共に、年代ごとの不登校の児童生徒数と合わせて社会状況の変化を振り返ります。そこから、坂本さんたちは「小学校の低学年や未就学のこどもたちに目を向けなければいけなかったのではないか、焦点がずれていたんじゃないか」という考えに至るのです。私は、坂本さんからこのお話をお聞きしたとき、コロナ禍における子どもの状況にもつながるのではないかと思いました。坂本さんの経験と分析から編み出された理論は大きな示唆を与えてくれました。

坂本さんは、長期間に渡って子どもと関わりを持とうとしています。そのため、坂本さんの居場所の中では、子ども自身の立場や役割が変わっていっています。一人の子どもが役割を変化させることができる居場所になっているわけです。

もう一つ、坂本さんのお話で取り上げたいことがあります。坂本さんは「曖昧な場所」を大切にしています。今の社会では曖昧さを排除しようと、きっちり区切り、一つ一つに目的を持たせたものばかりです。そうすると、「ここ（場所）は○○をやるところだから、△△をやってはいけない」といったように禁止事項も増えます。そこに入れないこども、そこから排除されるこどもも出てしまいます。場所はもちろん、時間についても同様です。けれど、あいまいな場所、あいまいな時間は、人が生きるうえでとても大切な気がします。

インタビュー終了後、坂本さんとの雑談で、キセキのようなことが起こりました。私は中学時代、仙台市で暮らしており、塾に通っていたのですが、その塾は、なんと坂本さんが講師をされていた塾だったことが判明したのです。そしてその塾の経営者は、坂本さんの「塾事業の師匠」だ、と。その塾は進学塾ではありましたが、受験戦争真っただ中、息苦しい学校生活を送っていた私にとって、受験勉強のためというより、唯一の仲間や講師の先生と学び合う場所、雑談して楽しめる場所でした。塾仲間とは40年以上経った今でも関係が続いています。坂本さんが関わっていた塾だと知った私は「なるほど！」と納得したのでした。

-------------------------------------

聞き手　小林成親、酒井真由子

まとめ　酒井真由子

編集　清水冬音